

発行責任者

外旭川病院ホスピス 嘉藤 茂

〒010-0802

秋田市外旭川字三後田142

TEL 018-868-5511
FAX 018-868-5577
HP www/jkk-sotohp.or.jp/sotohp/

がんで亡くなった義父が教えてくれたこと

医療法人惇慧会 事務局長

外旭川病院 事務長 松本 金則

平成27年2月9日12時55分、私の義父は家族から見守られながら総合病院の病室で静かに旅立ちをむかえました。2日後が義父の74歳の誕生日でしたので、私たち家族にとっては早すぎるお別れとなってしまいました。

義父が末期がんであるということがわかったのは1月末のことです。1月中旬に体調不良を訴え、総合病院を受診し検査を受けたところ、がんが発覚しました。翌週には精密検査の為に入院し、検査の結果はかなり進行した末期がんであること、しかも余命は1~2ヶ月であることが告知されたのでした。残念ながら義父はそのまま退院することもなく入院からわずか2週間で帰らぬ人となってしまったのでした。

義父が末期がんであるという知らせを受けてから亡くなるまで、わずか10日間という非常に短い時間でしたが、義父の看病を通じ、あるいはその間に義父と話した様々なことを通じて、非常に多くのことを学ぶことができました。義父は人生の残された時間がたった1か月かもしれないと言われ、どれほどの悔しさや悲しさ、絶望感、孤独感といったものを感じていたのでしょうか。しかしその間、家族には一度も弱音を吐くことも、怒りをぶつけることもなく、ただひたすらに残される家族のことを思いやり、主治医の先生や看護師さんへの感謝の言葉と配慮の言葉を言い続けていたのでした。わずかな余命を宣告されながら、それでもなお、強くしかも優しく壮絶に生き続ける義父の姿を目の当たりにし、人生の先輩として、ただただ深く尊敬するばかりでした。ある日、義父に一言私から言ったことがあります。「お義父さん、辛いときは辛いと言ってもいいんですよ。」義父は「そうだよな。俺もつらいもんな。」少しだけ話してくれた本当の気持ちだったのかもしれません。

そんな義父の入院中の希望は、一度帰宅し身辺の整理をしたいということでした。ところがいくら自宅に帰りたくても、もう自由に体を動かすことができないくらい義父の病気は進行してしまっていたのでした。このような状態になってしまっては、排泄の問題や痛みの問題、点滴の問題、呼吸の問題、急変時の対応の問題など、家族にとっては簡単に解決することのできないことばかりだったので。これは多くのがん患者さんの家族が直面する問題でもあり、在宅療養の必要性や課題について義父が身をもって教えてくれたことだと思います。

また、自宅に帰ることが難しいと感じた義父は、私からの勧めにより外旭川病院のホスピスに転院することを新たな希望として心の支えにしてくれていました。「身内に外旭川病院の職員がいて良かった。ただ入院してたんじゃ、ホスピスのことなんてわからないもんな。」義父が何気なく発した言葉にはっと気づかされました。がんで入院されている方で、ホスピスを知らない今までいる方も決して少なくないということです。これもまた外旭川病院に勤務する息子に身をもって教えてくれたことだと思います。

義父はホスピスへの転院を最後の希望として病気と闘っておりましたが、転院予定日の早朝に急変してしまい、ホスピスへ転院する前に旅立っていました。ただその最後の瞬間は苦しむこともなく、家族に見守られながら穏やかにむかえることができました。

これからは、がんという病気を通じて義父から教えていただいた多くのことを胸に刻み、義父を人生の師とし、一日一日を大事に生きていきたいと思います。

義父の治療や看病をしていただいた総合病院の先生や看護師さんに感謝申し上げると共に、ホスピスへの転院の際、親身になって相談にのっていただいた外旭川病院の職員の皆様に感謝申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。



ご遺族からのお便り



献身的な看護に励まれ

武田 敦子

松尾先生

毎日気にかかり乍ら体調が快復せず落ち込んで居ります。御無礼の程お許し下さいませ。

夫は、前医で最後までめんどうを見て頂く約束を交わしていた様で、尊厳死協会に入っていることもあり延命治療はお断り出来るものと思っていた自分の考えが甘かったことに気付いて、そちらに転院をお願いいたしました処、早速にも受け入れて頂きどれ程安堵致しましたことか、顔の表情が別人の如く変わって居りました。

先生をはじめスタッフの皆様の献身的な介護に励まれ、最後には白衣まで着せて頂き

(元外科医)、細やかな愛情には日々驚くばかり、このご恩は決して終生忘れることはございません。

幾重にも厚く々お禮を申し上げるばかりで

ございます。

次から次へと何やら書類が送られて参りますが、体はフラフラ頭がボッとして、情けない有様で御座います。先生にご記入頂きたい書類も同封させて頂きました。ご多用中度々申し訳ありませんがどうぞよろしくお願い申し上げます。

元気になり次第、かならず、かならず御挨拶に伺う心算でございますのでよろしく、よろしくお伝えくださいませ。

別添の手紙は夫がそちらにお世話になった直後、親しい友人達に宛てた手紙で御座います。



<別添のお手紙>

拝啓 暑さが日ごとに加わってまいりますが、いかがお過ごしでしょうか?余りにも永い間ご無沙汰致し、申し訳ございません。

実は小生一昨年6月7日病名:左腎細胞癌 病理診断:淡明細胞型にて手術を受け人生最大のピンチをさまよい三年が経ちました。手術はトラブルなく終了しましたが、Tumor(腫瘍)はかなり大きく腎臓外へ浸潤があり、術後抗癌剤は断り、免疫療法(気休め程度)を行っておりました。自ら選んだ闘病生活であり、後悔はありません。

癌とは比較的近いところで生きてきた外科医であったのに、自分がなるまでは、癌は矢張り「他人事」でした。医師が癌になって初めて患者の立場とはどういうものかを知り、健康な人は本当の意味で病人の気持ちちは理解できないことを思い知らされました。

死を思うことは、生を充実させること、この三年間は貴重で濃密な時間でした。

人間の死の予告など本人にも医師にも分からず、手術以来寿命は神の領域であり自我を捨て無我となって安らかに死を迎えるべき境地に至りました。

これまで永い間色々とお世話になりましたこと、厚く感謝申し上げます。どうぞくれぐれもご自愛の程御祈り申し上げます。

敬具

Aufwiedersehen
(さようなら)



ふと周りを見てみると

4月に入り、新年度が始まりましたね。私事ではありますが、新年度を機に何かにチャレンジしようとジョギングを始めてみました。

最初は決めたコースを、歩いた方が速いのでは？というペースでやっと・・・で走っていましたが、今では少し余裕を持って走れるようになりました。走るのに余裕が出てくると、周りを見る余裕も出てくるもので、ふと周りを見てみると、新しくできたお店や新入生と思われる初々しい学生さん、草木の移ろいなど、同じコースでもその時々で色々な風景が見えてきて、走るのも少し楽しく感じるようになりました。

ホスピス病棟でも、ふと周りを見てみると、ボランティアさんが作ってくれた季節

2階ホスピス病棟看護師 佐藤 幸

の飾り付け、窓から見える公園の木々、行事に参加している患者さんやご家族と散歩している患者さんの笑顔・・・色々な風景をみることができます。

そんな一コマから患者さんやご家族と話に花が咲いたり、患者さんの新しい一面を発見し、患者さんへのケアに繋がることもあります。

まだまだ未熟者ではありますが、忙しい日々の中でも時には周りに目を向けて、患者さんやご家族に少しでも寄り添える看護を提供していけたら、と思う今日この頃です。



あなたで良かった

5階ホスピス病棟看護師 黒澤 みき子

4月になり「早く桜、咲かないかなあ。」と楽しみにしていました。

いつもより少し早いですが、きれいに咲きましたネ。毎年、病院の側の桜は、楽しみにしていました。5階ホスピスに異動になって9ヶ月。忙しい日々を送っていますが、今年は、5階からの桜を眺め、癒されています。桜は散るときがきれいだという人もいますが、少し寂しいので、このまま散らなければ良いのにと思っています。

日々業務におわれ忙しい中でも趣味にいそしんだり、姪っ子、甥っ子と遊んだりして自分の時間も楽しんでおります。姪っ子は、まだ3歳ですが、一緒に大好きなバスケの試合を見に行き、お気に入りの選手を二人で応援しています。今では、私より大きな声で大好きな選手にエールを送っています。

甥っ子（7ヶ月）はというと、人見知りをするのか、私が抱っこをすると大泣きします。しかし、私の存在が気になるのか、常に私を見つめています。「そんなに気になるのなら」と抱っこをすると泣いてしまします。まったく男心はわかりません。

以前、入院患者様のご家族に「あなたで良かった。」と嬉しい言葉をかけていただいたことがあります。この言葉は私にとって一番の宝物です。これからも、患者様、ご家族、スタッフに「あなたで良かった。」と思っていただけるような努力をしていきたいと思いますが、甥っ子にも「みきちゃんが良い！」と言ってもらえるようになりたいなあと思います。





しみてくる民謡

ホスピスピボランティア 長崎 淳子

3月。明るい陽ざしがさしこむ気持ちのいい日でした。いつものようにIさんのお部屋にコーヒーをお持ちしました。ほんとうにおいしいよと満足そうに飲まれました。ありがとうございましたねと言い、それではお返しにとお得意の民謡をひとつ声高らかに唄ってくださいました。

耳にしながら思い出したのは、10年ほど前の100日をこえる船旅でした。80日を過ぎてホームシックになった私を落ち着かせてくれたのは民謡でした。大好きなクラシック音楽ではなかったのです。何日間か民謡を聞き続け、次第に気持ちが慰められ、なんとか元気になりました。なぜコンサートにも出かけるほど好きだったショパンでもなくモーツアルトでもなかつたのか不思議でなりませんでした。

しみてくる民謡の節回しに涙さえ流した自分に、自分でも意外でした。民謡は小さいときよくラジオから流れていました。夕方6時すぎNHKの民謡教室を聞きながら夕食を食べたのを覚えています。その唄声が無意識のうちに自分の中に入り込み、自分の中に小さな居場所を作っていたとしか思えません。彼女の真剣に唄う姿を目につしながら、ひさしぶりにしみじみとしたひと時でした。



さくら祭りでの民謡大会



少しでもお役に立てたら

ホスピスピボランティア 齊藤 佳夫

7年前療養病棟で、父がお世話になりました。定年後の時間を、少しは有意義に使わなくてはと思って、月曜午後の活動と、コスマスの会・メロディの会に参加させて頂いています。

福祉犬の病室ご訪問は、ワンちゃんの好きな方も、そうでもない方もとても喜んで頂けて、傍にいてもうれしくなります。聖書のお話は、牧師さんのお祈りの後で、賛美歌を歌って、少し厳肅な感じです。コスマスの会では、冬のお花の確保の為、温室を活用しようと研究中です。

コーディネーターはじめ所先輩のご指導で、活動に参加してからもうじき2年になります。

これまで、沢山の患者さんやご家族との出会いがありました。秋田のことが余りわからなくて、教えて頂くばかりでした。特に患者さんのTさんは、同じ町内ご出身の方でもあ

り、農学校の廄舎のお話など、懐かしく伺いました。歌がとても上手な方で、秋田県民歌を演奏する時、一緒に歌って頂いている気がします。

いつも平常心でと願いつつ、ボランティア活動はその一里塚でもあります。色々な日常活動で、ともすれば、単調になりがちな入院生活に、彩を添えられたり、少しでも、患者さんの気分転換のお役に立てたらと思っています。



月一回のオカリナ演奏会



H26年度の相談・ホスピス外来件数とMSWの業務について

医療ソーシャルワーカー 佐藤 悠一

H26年度、相談件数は985件で過去3年間のデータを比較すると前年度比+144件、前々年度比+224件と過去最多でした。相談経路としてご家族からの入院相談が最も多く、次いで医療機関やケアマネジャーからの相談問い合わせも多い状況です。また、ご本人からの直接の相談も年々増加傾向にあり、独居生活を送られていたり家族はいても遠方で頼ることが困難な方等、近年、様々なケースが増えてきています。

ホスピスへの申し込み手続きの流れとしましては、右の図の流れの通りで①相談（電話か面談）②ホスピス外来受診（ご家族様のみの受診も可）③入院予約・待機（多少の時間お待ち頂きます）④入院（ベットが空き次第、ご連絡致します）と大まかですがこのような流れで入院手続きを取っていきます。

実際、H26年度のホスピス外来は340件となっており、ほぼ毎日のように外来を実施しております。現在、外来医は2名で対応しており、平日の午後に完全予約制で患者・ご家族様と面談し、これまでの病気の経過や今後のご希望などを伺い、当院でお手伝い可能な最大の提案をさせていただきます。基本姿勢として相手側の立場に立ち、入院が必要なタイミングで当院が出来る限りの支援をしていくという一つの考え方がホスピス病棟にはあります。

ここで少しMSW（医療ソーシャルワーカー）の業務についてご紹介したいと思います。まずははじめにMSWって聞いて何の仕事をしているかすぐに答えられる人が何人いるでしょうか？正直なところわからない方が多いと思います。簡単に説明すると「患者や家族の方々の相談に乗る事で、経済的・心理的・社会的な悩み等の問題解決のお手伝いをする仕事」をしています。

では、経済的・心理的・社会的って具体的にどんなことを指すかというと①経済的（医療費や生活費が心配）②心理的（病気や療養について悩んでいる）③社会的（入院時の療養・家族・仕事・生活面での不安・問題、退院と言われたが、生活できるか不安）等、人間だれしも病気にかかると不安はつきものです。そんな時にMSWのような専門的な知識を身に付けた医療者が支援することで相談者の不安を取り除いていきます。

実際に①適切な社会福祉制度等の情報提供・各相談機関との連絡調整②適切な医師や看護師などの専門職に紹介し、受診などを通じて情報を得られる援助③医師や看護師などへの相談調整・家族間会議や介護保険や障害者支援費制度などの情報提供・活用援助④社会福祉制度の活用・地域との連携を密接にとる事により、安全・安心して・スムーズに退院できるように援助することなど多岐に渡ります。

このように上記は業務内容の一例になりますが、当院でも現在、4名のMSWが外来の患者様や入院中の患者・家族様のお手伝いをさせていただいております。もしご相談がありましたらほんの些細なことでも構いませんので相談室へお寄りいただければ幸いです。

1. ご相談（お電話・来院）
↓
2. ホスピス外来（完全予約制）
↓
3. 入院予約・待機
↓
4. 入院（連絡・入院調整）



第2回ホスピス緩和ケア市民公開講座を開催

今年度も、4月4日（土）：アルヴェ、4月11日（土）：外旭川病院と2回の同講座を開催し無事終了しました。

一日目は、前半の「ホスピスケアの紹介」を5階ホスピスの富野看護主任（緩和ケア認定看護師）が、後半の「患者さんの身体と心」を松尾医師（日本緩和医療学会 緩和医療専門医）が講師を務めてくださいました。

参加者数は、約150名と昨年の第1回目を大きく上回り、アルヴェの多目的ホールがほぼ埋め尽くされました。参加して下さった方は、ホスピス緩和ケアについて知りたいという一般市民の方（中には自分あるいは家族が現在癌を患っている方も）、医療関係者や施設のスタッフ、医療関係の学生、ホスピスボランティアを希望する方等多種にわたっているようでした。

協力いただいたアンケートを拝見すると、講師の話し方や内容がわかりやすく、参加してよかったですという参加者の気持ちが伝わってきました。その一部を紹介しますと、「ホスピスと緩和ケアについてよくわかりました」「人生の最後には必要な施設だと思いました」「患者さんの症状にあわせ痛みを和らげてくれるなど、心配りの医療がわかりました」「ホスピス医がどのようなケアをしているのか知ることができ大変勉強になりました」「患者さんがどのような状態であっても、一人の人間として接していることに感銘を受けました」「苦痛な症状が出てきた場合にはホスピスに入りたいと思いました」「自分の終末、家族の終末期をよく考える機会になりました」「モルヒネを誤解していました」「予後、痛み、医療用麻薬、患者さんの心について大変わかりやすく説明して頂き勉強になりました」「主人が亡くなる数週間前からの状態が、まさに先生の話されたとおりでした。その当時は、医師の話を受け入れることはできませんでした。もっと早く松尾先生の話を聞きたかった」「将来緩和ケアの現場で働きたいと思いました」「重篤な病気であっても、ホスピスケアによって気持ちが前向きになり、納得のいく自分の生き方ができると感じました」「ボランティアの人たちは必要だと思いました」等々、参加して下さった皆様のあつい思いが表れていました。

二日目は、ホスピスボランティアを希望される方等を対象に開催ましたが、約30名の参加がありました。前半、嘉藤ホスピス長から「ホスピスボランティアに期待するもの」と題して、外旭川病院ホスピスの理念、ホスピスボランティアの位置・役割等、ボランティア活動をする上に必要な事を具体的に説明して下さいました。また、実際の活動の様子を知るために、現ボランティアを代表して吉田さんが体験談を、ボランティアコーディネーターの立場で寺永が活動の様子を写真で紹介しました。18名の方がボランティアを希望され、面接を受けて頂くことになっています。（文責：寺永守男）

編集後記

本年度のホスピス緩和ケア市民公開講座には、昨年を上回る大勢の市民の皆様に参加していただき、重ねて感謝を申し上げます。講座ではホスピスという場で私たち医療者が体験し、学びえたことをお話しさせてもらいました。アンケートを集計して、私たちの思いをしっかりと届けることができたと理解しました。これは講座を企画した私たちの喜びであると同時に、病棟で私たちに学びの機会を与え、理解の遅い私たちに忍耐し、時間を共にして下さった多くの患者さんとご家族の喜びでもあると思います。これからも患者さんやご家族からのメッセージを市民の皆様に仲介する役割を果たしていきたい、と強く感じている次第です。

（S.K）



一日目、アルヴェでの講座風景